

あぱっさ

アマゾンでの精霊 vol. 30

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体 Rainforest Foundation Japan

〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL: 03-5481-1912 FAX: 03-5481-1913
MAIL: xingu@rainforestjp.com HP: www.rainforestjp.com

[ご住所等変更ございましたらご連絡いただけますと幸いです]

HOW TO HELP	年会費	大人	5,000円
		18歳以下	3,000円

年会費・寄付金振込先

口座名	熱帯森林保護団体
ゆうちょ銀行	郵便振替口座 00140-3-144187
三井住友銀行 東京中央支店	普通口座 7066247

※ 銀行振込の方は、必ずお名前とご連絡先を別途、当団体までご一報をお願い致します。

■ 大きな時代の変化の中で

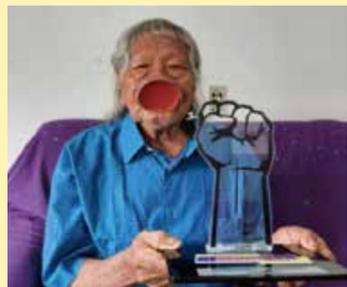
今年にはコロナ禍で始まり、未だ世界中がこの目に見えない怪物に振り回されている。自分にも起こりうる問題として、誰も向き合わざるを得ない。巷ではワクチン開発を躍起になって進めているが、何故?このようになったかその原因を考えなければ主客転倒になる。乱開発によりアマゾンの森は凄まじい勢いでここ数年消滅し、追い討ちをかけるように開発の影響で高温、乾燥化に拍車がかかり大火災で多くの森が燃えた。此のごに及んでも、世界を動かしている人々は経済優先の悪夢から目覚めない。この人災であるコロナは私たちに警鐘を鳴らし、気づきのチャンスを与えた。

30年前、初めてアマゾンのジャングルに入った時の感動を今でも忘れない。「見るは良し!だが触るな!」と森が言っているような怖さもあったが、本能的にこの自然を残さなければいけないと感じた。自然との共生などとはおこがましく、自然への服従しかない。

コロナ禍はインディオ社会にも及び、カヤボ族の長老ラオーニやメガロンも感染したが完治した。しかしイアラピチ族の偉大なる族長アリタナが、旅立ったことは悲しく残念だった。彼と昨年会った時、支援事業の養蜂に期待していたことを思い出す。カヤボ族とジュルーナ族の若者で組織した「消防団」は防火、消火活動で森を火から守り、頼もしい限り。養蜂事業は蜂蜜採取も終了し、着々と進んでいる。今年は現地視察が叶わなかったけれど、インディオ保護区への滞在許可が降り次第、現場にいつでも行ける準備は出来ている。

6月に催した「どこいくの」展はコロナ出現以前から計画し、法律で禁止されない限り実施するつもりだったので、予定通り開催した。スタッフ全員が一丸となってエネルギーを注ぎ、会場はアマゾンの精霊が結界を張り巡らしたかの如く、安寧で活気に溢れ、スタッフを始めとして300人以上の来場者の方々が誰一人としてコロナ感染せずに、このイベントが成功したことに感謝している。今一番伝えたいことは、人々が多岐にわたる情報に惑わされることなく、未来に向かって「どこいかされるの」ではなく、何を選択しどう生きるかを問う「どこいくの」の答えを、主体性を持って探し求めて頂けることを切に願います。次世代が安心して存続していける環境を残すことが、私たち先人の責任と義務であると私は考える。

(南 研子)



ラオーニが5つの賞を受賞しました!

- 1 抵抗の声賞 主宰:議員連盟「国会マイノリティ・リーダーシップ」(左写真)
- 2 ダルシー・ヒベイロ財団賞 主宰:ダルシー・ヒベイロ財団
- 3 人種平等にYes!賞 主宰:NGO「ブラジル・アイデンティティー・インスティテュート」
- 4 マトグロッソ州立大学 名誉博士号 主宰:マトグロッソ州立大学
- 5 国際平和栄誉賞 主宰:アメリカ平和研究所

■ 「生きるために、生きる」

RFJひろしまスタッフ 国竹 優実

私たちがウイルスの存在を受け容れることができないがために、たった半年ほどで、ここまで社会が大きく変わっていきこうとしている。私たちが、生きているからこそ、死が訪れるのだ。死はいつも私たちの隣にいる。それを私たちが知らなかっただけだ。死を意識するからこそ、死なないために生きるのではなく、生きるために生きるのではないだろうか。生きるために生きるとはどういうことだろう。

アマゾンには、日本で問題となっている自殺、うつ病、いじめはない。寝たきり、認知症もない。私たちは、年をとれば病気になり、寝たきりになり、誰かの手を取りながら生活し、最後は病院か介護施設のベッドで生涯を終える、といったような将来を描いていないだろうか。そのために医療保険を払い、そのお金を稼ぐために人生における大半の時間を仕事に費やし、日々の生活を蔑ろにしていないだろうか。先の見えない将来への不安を取り除くために、今していることは、いったいなんだろう。その将来とは、心から思い描いた未来だろうか。

アマゾンには過去形も未来形も存在しない。過去も、未来も、全ては"今"の連続である。今を大切にしなければ、将来を大切にすることもできない。それは「今さえ良ければいい」という目先の利益を優先したものの見方では決していない。人類の長い長い歴史の中で、これらの多くの問題が起こってから、おそらく50年も経っていない。アマゾンにはない。自然界には存在しない。私たちの社会に内在している様々な問題は、人間の行動によって引き起こされたものだ。私たちは何かあればすぐ病院に行き、薬に頼る。それがまた別の問題を生む。依存を生む。これらは対処療法でしかない。自分というものと向き合い、日々の生活を省みることなしに、根本的な解決はありえない。

先住民は教えてくれている。人間である前に生物であることを自覚し、次世代に命を繋ぐため、「足るを知る」生活を送って生きている。この地球にある自然が生み出したもので必要ないものなどない。人間の都合で決めているだけだ。

研子さんは言った。「死ぬときはにっこり笑って、ありがたうと言って死にたい」と。私は、そんな生き方が出来ているだろうか。日々自分に問いかけ、先住民の生き方を道標にし、生きるために生きる、人としての道を模索し続けたいと思う。

感性が豊かでステキな若手ホープ。一見のママでもある彼女にエールを送ります。

カヤボ族ボディペインティング模様の布を販売いたします



カヤボ族の力強いボディペインティングの模様はアマゾンの風を運んでくれます。「どこいくの」展で使われた布と同じ布(新品)。巾が広いのでそのままソファカバーやベッドカバー、ワンピースやパンツにも仕立てやすいです。

1m(160cm巾) ¥5,000(送料・消費税込)



★RFJホームページのグッズ販売からご購入いただけます。

<https://rainforestjp.com/>

ブラジルの深刻な新型コロナ危機、森林破壊の拡大、アマゾン開発へと突き進む政権の姿勢……。アマゾン熱帯林とそこに生きる先住民族にとって、2020年は困難が深まった年でした。いっぽう、コロナ危機をきっかけに食糧自給や森林保護の重要性が再認識される中で、自然と調和する持続可能な先住民族の生き方への評価もまた高まりつつあります。アマゾンと先住民族をめぐるブラジルの現状、そしてパンデミック後の世界にますます重要性を増す先住民族の存在の価値についてご報告します。

■ コロナ危機が気づかせてくれた「地球の健康」の価値

世界に突然現れた新型コロナウィルスの脅威は、自然破壊によって未知の病原体が生み出されるリスクを人類に突き付けました。私たちの健康は、健康な地球の上に成り立っています。多様性に満ちた自然、清浄な空気、豊かで清らかな水によって私たちの生活と命は支えられているのです。

日本でも一時、小麦粉製品が商店の棚から消えたように、このコロナ危機では、食糧を輸入に頼ることの脆弱性もまたあらわになりました。あばっさ前号(29号)でご報告した通り、アマゾン先住民族社会におけるコロナ禍は、広大な森が支えて

くれる自給自足の暮らしが残る場所では、深刻な感染拡大には至りませんでした。当団体支援対象地のアマゾン南部シンガー川流域は、そのような場所のひとつです。

地球上の生物多様性の85%が先住民族が暮らす自然の中にあると言われています。ブラジルでは先住民族保護区だけは憲法の規定上、基本的には開発の手を入れられない場所として保護されてきました。世界最大の熱帯林アマゾン、そして地球の健康は、先住民族の存在によって守られています。

■ 昨年を超える規模のアマゾン森林破壊と開発推進の動き

世界中を駆けめぐった昨年のアマゾン森林火災のニュースについて、まだ記憶に新しい方も多いでしょう。今年はほとんど報道されることがありませんでしたが、実際にはアマゾンは昨年を上回る規模で破壊が進んでいます。昨年1年間の破壊面積は555km²、今年は10月末までに836km²の森林が失われました。

森林伐採と焼き払いは法律で厳しく規制されており、アマゾン破壊面積の95%が違法行為によるものです。アマゾン大規模開発推進を掲げる現政権下で違法行為の監視摘発予算は大幅に削減され、さらには、摘発に対して「発展を邪魔する行為だ」と公然と批判する大統領の姿勢が、違法行為にお墨付きを与える形となってきました。

また現政権は、先住民族保護区内での開発を可能にする法案

の準備も進めています。そこに暮らす先住民族の同意なしに地下資源採掘を可能にする、保護区の森を勝手に伐採して不法占拠状態にある大農場(アマゾン各地に多数存在します)を合法化する、などの法案です。

これらに対して先住民族団体は強く批判の声を上げ、「アマゾンを守れ」と内外の世論に働きかけてきました。コロナ禍のいまは、若手民族リーダーたちによるオンライン・シンポジウムも盛んに実施されています。また11月15日に投票が予定されている全国一斉市長選挙・市議会選挙では、過去最高の数の先住民候補が立っており、開票結果に期待したいです。



シンガー川流域の先住民族保護区に迫る大規模農場開発の波
撮影:下郷さとみ



9月に大規模な森林火災が発生し消防団が必死の消火活動を行いました
撮影:タラジョ(消防団メンバー)



9月、いよいよハチミツを絞る作業の開始です
撮影:コニコホ(マチブ民族の養蜂士)

■ 「貧困問題解消のためアマゾン開発を」は本当？

——— レアル安による輸出増大が庶民の家計を圧迫

米、フェジョン豆、食用油、牛乳……。ブラジルでは、基礎食糧を中心に物価上昇が続いています。主食の米の小売価格は昨年の2倍以上に高騰し、新型コロナ禍による生活困窮、そしてこの物価高騰が二重に貧困層を直撃しています。いっぽう富裕層にとっては、いずれにおいてもダメージは小さく、ブラジルの構造的な社会格差がこんな所にもあらわになっています。

食糧価格高騰の原因は、ひとえにレアル安の進行にあります。またコロナ禍の影響で、より安い農産品への需要が世界的に高まったこと、国内消費も伸びたことも理由にあるようです。グローバル経済において、商品は商機がより大きな市場を目指して動いていきます。レアル安などにより輸出増→国内の食糧不足→国内小売価格高騰>に至ったというわけです。

——— 「命の糧」の食糧が「コモディティ」と化す

経済グローバル化のもとで命の糧のはずの食糧は、より多く利益を生み出す市場を目指して国境を越えて行く「コモディティ(商品)」と化します。

ブラジルでは国の基幹産業であるアグリビジネスは免税措置と多額の補助金で手厚く守られています。そして輸出増による今回の価格高騰では、大豆とトウモロコシの輸入関税をゼロに

——— ブラジル市民の食を支えるのは「小さな農業」

アグリビジネスが生むのは主に穀物と牛肉です。アマゾン地方の農場面積は、1軒あたり数千ha以上にもおよぶ大規模なものです。牧畜は通年完全放牧、穀物栽培は高度に機械化が進んでおり、数千ha規模の農場でも雇用者数は50人程度にすぎません。

いっぽう、ブラジル市民の日々の食卓をまかなう食糧の7割は、小農(家族的農業)が生産を担っています。それは環境を壊さない持続可能な農業です。アグリビジネスは自国市民の「命の糧」を保障しませんし、貧困層は仮に希望したとしても巨大資本が必要な大規模農業の担い手にはなれません。

現政権は「アマゾン地方の貧困問題解消のために開発を」と

なお、価格高騰は生産減によるものではありません。主要穀物統計を見れば過去20年以上に渡って米の生産量は安定、フェジョン豆や食用油の原料の大豆(搾りかすは家畜飼料に)は大幅に生産増となっています。

2015年に1レアルが4ドルに迫り「このままではブラジル経済が崩壊する」とジウマールセフ大統領おろしが始まり、2016年8月に弾劾が成立。2018年の大統領選では「ブラジル経済を一気に立て直してみせる」の言葉で人心を掴んだボルソナロ氏が当選に至りました。そしていま、レアルは2019年1月の新政権発足以降、下落を続け、1ドル6レアルに迫っています。

する価格安定策が急遽取られました。輸出して足りなくなった分をよその国から輸入する。これもまたグローバル経済の姿です。

なお、ブラジルの主要農産品輸出先のトップは、トウモロコシが日本(輸出量全体の15%)、大豆が中国(全体の78%)、牛肉が中国(全体の52%)となっています。(2019年)

唱えています。しかし、大規模農業開発を推進しても貧困問題の解消にはつながりません。いままさに起きている「輸出増による食糧価格高騰」という事象ひとつを取ってみても、そのことがよくわかります。

また、ブラジルのように構造的な社会格差の大きな国では、開発によって都市化が進めば、低賃金で働く貧困層の存在をより多く必要とするようになります。つまり開発は逆に、新たな貧困問題を生み出す要因ともなりかねません。アマゾン地方の貧困問題の解消の答えは、担い手の多くが貧困層である「小さな農業」と、そのコミュニティのエンパワーメントから始まります。

■ グリーン経済でパンデミック後の世界を築く

パンデミック後の世界をどう築いて行くかをめぐって、いま「地球の健康」や「食糧主権」(食糧自給率を上げて輸入に頼らない構造を作る)が盛んに議論されています。ブラジルでもコロナ禍中の7月に興味深い報告書が発表されました。国際NGOのWRIブラジル

支部がまとめた『新たな時代への新たな経済』です。そこでは持続可能なエネルギーや小さな農業を推進するグリーン経済が、国内に200万人の雇用と2兆8千億レアル(1レアルは約20円)の経済効果を生み出すと試算されています。

——— アマゾン先住民族が生み出すグリーン経済

先住民族もまた「小さな農業」の担い手です。持続可能な形の焼畑農業を数千年に渡ってアマゾンの森で営んできました。そして当団体が支援する養蜂事業は、まさにグリーン経済のひとつの試みだと言えます。森林資源を活かした持続可能な自立経済を生み出すことを目的に、現在5民族の計5つの村で養蜂に取り組んでいます。「ハチミツを細々と市販化する程度でオルタナティブな経済が果たして作り出せるのか」と疑問に思う方もいるかもしれませんが。しかし経済とは、単に<物を作る・売って金銭と交換する>だけのものではないはずです。

養蜂を通して主体的に事業を運営していく力を獲得すること。つまりそこで発揮される「プロタゴニズム」(ポルトガル語で「当事者自身が主体性を持つ運動のあり方」と「自律の力」)がアマゾンと先住民族をめぐる困難なブラジルの現状を変えていく着実な力へとつながっていきます。

自給自足と自立経済の維持には、その基盤となる森林の保護もまた欠かせません。当団体が支援する消防団事業もまた、若い団員たちのプロタゴニズムと自律の力のエンパワーメントを基本に置いて進めています。